

横井也有（三）

伊藤浩睦

横井也有は、元禄十五年（一七〇二年）に生まれて、天明三年（一七八三年）に亡くなっています。

松尾芭蕉が名古屋で「冬の日」を巻いたのが、貞享元年（一六八四年）ですから、也有が生まれた時には、俳諧は笑いを追いかけた時代から庶民の風雅を求めるものになっていました。

語呂合わせや、見立てや、駄洒落で笑いを求めた松永貞徳の俳諧が半世紀以上続き、異体破壊を競い合い謡や漢文の嵌め込みをやって強引に笑いを作った談林俳諧が十年余りありました。それが飽きられた時に、芭蕉の笑いを追わない俳諧が出現して、俳壇はそちらに靡き、滑稽の俳諧は廃れます。

也有の人生のなかで、俳諧の師匠と思われる人物は存在しません。武士でも町人の俳人の門下として俳諧を学ぶことは珍しくなかったのですが、若い日の也有が誰かに師事したとの記録はありません。祖父の横井野双が貞門の大物だった北村季吟に師事して俳諧を嗜んでいたもので、祖父の感化で俳諧を始めたとされています。

だとすれば、也有は同時代の俳人から俳諧を学ばず、祖父を介して六十年か七十年ほど前の俳人の北村季吟の俳諧を学んだことになります。

一僕とぼくぼくありく花見哉

女郎花たとへばあはの内侍かな

北村季吟は、こんな句を作っていた人でした。一僕の句は語呂合わせで笑いを狙っており、女郎花の方も、その花を粟（あわ）と見立て、女郎花を人とすれば阿波内侍（建礼門院の女房）だと掛け言葉で笑いを求めています。

俳諧が著しく停滞していた江戸後期であれば、これくらいの時間差があつて

もたいした違いはなかったのですが、大きな変化が俳諧に起きていた時期だっただけに、北村季吟に師事していた祖父の薫陶では時代からずれてしまいます。

つまり、也有は、芭蕉が登場して以後の俳諧を知らなかったわけではなく、芭蕉の俳文も発句も読み込み、敬った上で遠ざける姿勢でいたのです。

「翁の句に心得ぬ句あり共、更に良し悪しの論はすべからず。これは此道の神とも仏とも崇めて、格別の沙汰也」と著書の『管見草』に書いています。これは、芭蕉を神仏のように崇めるというものではありません。「芭蕉の句の良し悪しを今更論じてみても仕方がない。神仏のように崇めておけば良いが、自身がやりたい文芸とは違う」と言っているのです。

自身が学ぶ対象と考えていれば、どうにかして同じ地点に到達しようとするはずですが、也有は、芭蕉を神仏として崇めるようなことはしないし、初めから目標ともしていなかったのです。

少年期に祖父を通じて知った貞門派の作風が、自身の人間としての気分に合っていたのでしょう。仕事ではなく趣味として遊ぶのであれば、自身の気分に合っていることをやりたい。世間がそちらに靡いているからといって自身が真似る必要はない。世間に逆らって批判しても仕方がないから、神棚か仏壇に祀り上げておけば良いのだ。それが芭蕉に対する也有の本音だったのではないかと思われれます。